

編集後記

親鸞教学第6号をお届けいたします。

延塚助教は、親鸞教学60号に続いて真宗大学開学の精神についてたずねて下さいました。とくに今回は、福沢諭吉翁との比較を通しての論考です。大谷大学に学ぶものとして、日頃忘れがちである清沢先生の深さと広さをあわせもった志願を改めて思い知らされることです。

安藤助教には、大谷大学同和教育委員会にて研究課題とされた「業」の問題についての論文をいただきました。

また木越講師、御手洗特別研修員には、日頃の研究の一端を論文にして発表していただきました。

関戸堯海先生の原稿は、昨年十月六日真宗学会大会の記念講演に、加筆、訂正していただいたものです。本大会では、三明助教とともに日蓮聖人、親鸞聖人の『涅槃経』について講演をいただきました。日蓮聖人も親鸞聖人も、末法という、釈尊ましまさぬ時を生きるものとしての課題を担われ、ともに釈尊の遺教である『涅槃経』に注目されました。両先生とも長年『涅槃経』を視座にいられた研

究を続けておられ、その成果をふまえたご講演でした。

「先生、私は救われるのでしょうか。」講義が終わったあとの茶話会で、そう質問したことがあった。先生からは「ひと度、仏法にあったのだから、安心して歩めばよい」という趣旨の答えをいただいたように思う。思うというのは、実は、その答えについては、うろ覚えなのである。その程度の問いだったのである。しかしその答えが今になって、おりにふれて思い返されてくる。

先生は、よく『涅槃経』の「依法不依人」の遺教のことを紹介された。そして、仏法は、人に依るのではない、法に依るのだ。釈尊によって救われるのではない、釈尊も目覚めたその法に依って救われるのだと言われた。

「私は、救われるのでしょうか」という問いには、どこか、「私はどうなったから救われるのでしょうか。仏教を学んだら私はどう変れるのですか」という功利性を含んでいた。

惟うに「人に依るな」とは、他人に依るなという意味に止まるのではなく、自

分の考えに依ることも、また自分が変わるという夢を見ることも含まれているのだろう。実は、自分が変わる必要などない。「立脚地」こそ転じなくてはならない、それが「法に依る」ということである。自分が夢想していた救いはどこにもなく、もっと確かな歴史が流れている。その流れに預かりながら、自分の変革を夢見ていた。法とは、ながい人類の歴史をかけて見出し、言い当てる言葉である。そのような言葉に触れているにもかかわらず。その言葉にふれたという事実にはなんの感動ももたず自分の思い描く救いを求めていたのである。

ある宗教が、最近、「法に依らず、人に依る」ことの悲惨さを、文字どおり多くの犠牲を払って示してくれていた。それは依りどころを見失った現代の混迷の悲しいあだ花であったように思う。

思い返すと、あの問いへのお答えが、安田理深先生の色身の聲咳に接した最後の機会となった。(文責 編集子)